

## 小川洋子『ことり』

——慎ましくひそやかな孤児たちの物語——

佐々木重紀子

小川洋子は1988年の「揚羽蝶が壊れるとき」<sup>1)</sup>でのデビュー以来、疾病や心身の障害・違和感を独特の方法で表現してきた。特に注目されるのは、疾病などによる依存的存在とその人に寄り添う人とのケアの関係が〈規範的〉ではないことである。

「揚羽蝶が壊れるとき」では、認知症の高齢女性と暮らすのは孫娘である。娘や息子、ましてや「嫁」ではない。「妊娠カレンダー」<sup>2)</sup>では悪阻の女性を見つめるのは夫ではなく妹。「博士の愛した数式」<sup>3)</sup>で記憶障害の男性をケアするのは、唯一の家族である義姉ではなく、彼女に雇われた「家政婦」。そして「愛犬ベネディクト」<sup>4)</sup>では、独自の精神世界にひたる少女を、母ではなく祖父と兄とがそっと支えている。いわば〈非-規範的〉なケア関係である。それは登場人物たちがいづれも肉親と早くに別れたという設定に起因する。

たとえば「完璧な病室」<sup>5)</sup>では、重篤な弟を主人公である姉が看取る。姉弟の母は「発狂」して銀行強盗の猟銃に倒れ、父はそれ以前に病妻から去っている。弟の担当医の両親は「孤児院の経営」をしているため、医師はそこで多くのきょうだいとの別れを経験していた。苛酷な家族の歴史に翻弄されたであろう主人公が、今まさに弟をも失おうとするとき、深い喪失感を慰めるのはこの医師である。小川洋子の小説には、肉親に縁の薄い人々が運命を呪うことなく慎み深く生活を営んでおり、〈規範的〉家族への安易な肯定や憧憬を拒んでいるようだ。

十二年ぶりの長編小説『ことり』<sup>6)</sup>もまた、小川洋子らしい設定である。『ことり』はある男性

がメジロをいれた鳥籠を抱いて亡くなっていたことから書き起こされる。「死後幾日か経って発見された身寄りのない」、「小鳥の小父さん」の死は、傍から見れば〈規範的〉家族が不在の「孤独死」と定義されるだろう。しかし『ことり』はここから全篇をあげて小父さんの〈生〉の内実を描き、既成の用語に回収し得ない〈死〉の意味を開示する。

「小鳥の小父さん」という呼び名の意味やメジロを飼っていた理由は、小説を相当読み進まなければ判らない。しかし『ことり』はその迂遠ともいえる道程を、飽きさせない巧みな構成で読ませてゆく。

小父さんに孤児院（のち幼稚園）の鳥小屋を見せてくれたのは、七つ年上の「お兄さん」だった。だがこの兄は十一歳から「自分で編み出した言語」「ポーポー語」で喋りはじめていた。弟である小父さんには理解できるが、学術的には「単なる雑音」に過ぎない。息子の現状に背を向けたまま学問に没頭していた父は、小父さんが二十二歳のとき、自殺を疑わせるような死を遂げる。その九年前には母は失意のまますでに病死していた。父の死後、例外を恐れる兄と規則的習慣を築きあげながら、小父さんは「二人きりの生活」を慎ましくひそやかに営んでゆく。

以上のような兄弟二人の生活は、「リンデンバウム通りの双子」<sup>7)</sup>でも既に描かれている。この小説は、ある日本人小説家がドイツ語版の翻訳者であるハインツを訪問するところから始まる。ハインツは足が不自由になってから五年間、五階のアパートから下りたことがない。双子の弟カール

と共に、結婚せず「家政婦」の世話にもならず二人で暮らしている。兄弟の父は産婦人科医院を開業していたが、ナチス政権下逮捕され、医院は破壊されたという。そのうえ戦時下の不運な成り行きで家族と離れてしまった父は、罪悪感に苛まれ精神病棟で亡くなったのである。

父の不幸な死や兄弟二人の不自由を抱えた暮らしは、『ことり』と同様だ。しかしながら、リンデンバウム通りの兄弟が、「二人きりの生活」を守る理由は、公的な歴史のなかに見出せる。またハインツは日本人小説家という理解者の訪問を受け、背負われて五年ぶりに通りへ降り、積年のささやかな望みを叶えることもできた。

これに比べて『ことり』の兄弟には理解者が不在であり、時に世間の「悪意」にさらされもする。加えて彼らが二人きりである理由の真髄は、情緒的で私的であるゆえに物語のなかでしか了解されない。現実世界の既成の用語なら、福祉サービスを拒絶して孤立する兄弟とくくるのだろうか。だが兄弟は「地図にも載らないどこか遠い小島に暮らす、内気で善良な人々」のようだ。その小島は「波は穏やかで、思索にふけるに相応しい木陰があちこちにあり、頭上では小鳥たちがさえずっている」。この兄弟は現実を超越した世界の住人なのだ。そこに言語芸術の想像力がある。現実そのものではなく、現実を突きぬけた先の真実

を創造し描いているのだ。読者は本を閉じた後、<sup>さいわい</sup>〈福〉・<sup>しあわせ</sup>〈祉〉とは何かという問いに眼を開かれ、世界は別の相貌をみせる。

ところで『ことり』を「博士の愛した数式」のように映画にするならば、「ポーポー語」を音声にするのが最も困難であろう。それは文法と語彙と発音をもちながらも「よみがえらせるのは不可能」な言語だとある。そう表現できるのは文字だからだ。つまり『ことり』は、音声を伴う表現に〈翻訳〉されることを拒んでいる。文字表現の文学にのみ可能な方法が提示されているのである。

## 注

- 1) 『海燕』(1988年11月)初出、『完璧な病室』(福武書店、1989年)所収。第7回海燕新人文学賞受賞。
- 2) 『文学界』(1990年9月)初出、『妊娠カレンダー』(文藝春秋、1991年)所収。第104回芥川賞受賞。
- 3) 『新潮』(2003年7月)初出、『博士の愛した数式』(新潮社、2003年)。第55回読売文学賞、第1回本屋大賞受賞。
- 4) 『新潮』(2012年10月)初出、『いつも彼らはどこかに』(新潮社、2013年)所収。
- 5) 『海燕』(1989年3月)初出、『完璧な病室』(福武書店、1989年)所収。
- 6) 『ことり』(朝日新聞社、2012年)。平成24年度芸術選奨文部科学大臣賞(文学部門)受賞。
- 7) 『新潮』(2000年10月)初出、『まぶた』(新潮社、2001年)所収。